

ホメロスの《庭》

— 『オデュッセイア』における《美しい自然》の描写について —

野中 夏実

すぐれた神殿建築や彫刻作品が数多く生み出された古代ギリシアにおいて、造形芸術の分野でただ一つ例外としなければならないのは造園であるといわれている。

ギリシア本土では、古代エジプトのテル・エル・バハリの神園のような壮大な庭園の遺構は発見されていない。また遺構が残っていなくても、有名なバビロンの空中庭園についてそうであるように、文献の中に特筆すべき記録が見出されるということもない。庭園というものがそもそも、樹木や花や草などの移ろいやすい植物によって構成されている以上、かつてはあったものが失われてしまったのではないかと仮定してみることもできるが、考古学的にも文献的にも証拠が乏しいということになると、どうやらわれわれが古代ローマのヴィラの庭園やイタリア・ルネサンスの郊外別荘の庭園を思い浮べるときと同じ意味でのいわゆる庭園というものは、ギリシア本土にはもともとつくられなかったのではないかと考えざるを得なくなる。造園史家ファルケは、「ギリシアにおける各種の造形芸術は人力の及ぶかぎりの目覚しさを示すにもかかわらず、ひとり庭園がそれに伴っていない¹」という。

これには一般的にいくつかの原因が考えられている。たとえばギリシア本土に移住したギリシア人は、周辺の防衛に力を注ぎ、また定住後も紛争を繰り返したため、人類文化の総仕上げといわれる造園にまで立ち入る余裕がなかったとか、起伏に富むギリシアの地形と、植物の生育期に降水がきわめて少ないという気象条件が、庭園の発達にとって不都合であったことなどがその主なものである。

しかし紛争はどの地域にもどの時代においても認められるものであるし、ギリシアと同じように起伏に富む国土であるイタリアには逆に名園が輩出していることを考えると、これらの原因は必ずしも決定的なものではない。ただ、ギリシア造園の不振の原因を、ポリスの民主政体に求めたマリー・ルイズ・ゴタインの考え²は注目に値するであろう。古代ギリシアの都市国家

には、芸術的価値の高い公共建築は多く残っているが、豪華な邸宅はみつからない。ピエール・グリマルがシラクサのゲロンやヒエロンII世の庭園を例にあげながら、「ギリシア世界においてはじめていわゆる庭園の出現を見たのは、マグナ・グラエキアとシチリアにおいてであった²」と述べているように、宏大な邸宅を構え、さらに庭園を築くまでに到るには、たしかに経済的にも精神的にも余裕が必要なかもしれない。

しかしながら実際に庭園をつくらなかったということだけで、ギリシア人が庭園や自然美に無関心であったということにはならない。彼らはむしろ、現実の風土が乾燥した、雨の少ない、植物の生育しにくいものであればあるほど、よりいっそう美しい自然に対する敬虔といってもよいほどの憧れの気持を強めていったにちがいない。地形・気象条件その他によってそれを実現し得なかったとしても、ギリシア人が庭園についてのコンセプト、つまり庭園とはこうあるべきであるという庭園のアイデアのようなものを、明確な形で意識していたことはたしかであるように思われる。本稿は、『オデュッセイア』の中で庭園の描写と見られる箇所を整理してみることによって、ギリシア人の〈庭〉についてのコンセプトにいくらかでも迫ろうとする試みである。ここでは便宜上ホメロスの〈庭〉を次のような、互いに関連のある三つの種類に分け、それにしたがって見ていくことにする。三つの分類とはすなわち
1) 王侯貴族の庭園・果樹園 2) 女神の住処 3) 楽園・エリュシオン である。

1) 王侯貴族の庭園・果樹園

『オデュッセイア』の中でまずはじめに〈庭〉としてとりあげることができるのは、王侯貴族の庭園である。その典型的な例は、オデュッセウスが漂流の途中で世話になった、スケリア島の王アルキノースの宮殿の庭である。次に引用する叙述の原文では、「庭」を意味する 'ὄρταρος' という語が用いられているが、内容的には果樹園が主体になっていることがわかる。

中庭の外には・・・広い果樹園があり、垣根がはりめぐらしてある。そこには大きな木がたくさん生い茂っていた。梨、柘榴、みごとな実をならせた林檎、甘い無花果、豊かに茂ったオリーブ。その実は夏も冬も絶えることなく、不足することもない。西風の息吹がたえず実がなり、熟すのを助けている。だからいつも梨、林檎、葡萄の房、無花果が熟している。そこにはまた実り多い葡萄園があって、平らな陽のよくあたるところでは葡萄を關にあててかわかしているかと思えば、ほかのところでは取り入れの最

中であったり、足で踏んだりしている。最前列には花を落としたばかりのまだ熟していない房があり、ほかのものはかすかに色づきはじめている。最も遠い葡萄の木の列に沿ってあらゆる種類を取り揃えた、青々とした菜園がある。また二つの泉があって、一つは園の中のすみずみにまで水をもたらす、もう一つは中庭の門の下を通って館のほうに流れ、町の人々に水汲み場を提供している⁴。

この一節をよむと非常に豊かそうであるという印象を受けるが、細かく見ていくと重要な要素は次の三つに集約されるだろう。

① 木：梨 (ῥυζυνη)；柘榴 (ρόα)；林檎 (μηλιά)；無花果 (συκῆ)；
オリヴ (ἐλαία)；葡萄 (σταφυλή, ἀλόη)

② 水：泉 (κρήνη)

③ 西風 (Ζέφυρος)

さまざまな種類の木が出てくるが、それらはみな実をならせる果樹であり、一年中熟した実をたやすことがない。泉は一つのみならず二つもあって、園全体を潤し、また人々に水を提供する。そして西風は柔らかな息吹の心地よい風というだけでなく、豊饒をもたらすという象徴的意味も含んでいる。ここでは、英雄時代にふさわしい豊かさが強調されているといえるだろう。

もう一つ王侯貴族の果樹園としてあげることができるのは、老ラーエルテスの大きな果樹園 (μῆρας ὄρεος) である。求婚者退治を終えたオデュッセウスは、ラーエルテスの、豊かで手入れの行き届いた農地に赴き、百姓姿で地面を掘っている老父を見つける。そして本当にオデュッセウスであることの証拠を示してくれといわれると、少年のときにバルナッソスに猪狩りにいったときに足にうけた傷——乳母のエウリクレイアはこの傷によってオデュッセウスを認めたのであるが——と、果樹園の木を数え上げることによって自らの証とする。

この農園の中の、父上から頂戴した木のことを申しましょう。…まさしくこの木々の間を通りながら、父上は一つ一つの名を私に教え、梨の木を十三本、林檎の木を十本、無花果の木を四十本下さいました。そして五十列の葡萄の木をさして、私に下さるとお約束になったのでした⁵。

ここでもまた、梨、林檎、無花果、葡萄などあらゆる種類の果樹が植えられている。それらはよく手入れされていて、たえず熟した果実をもたらす。この断章では、豊かさの強調とともに、粗末な装いで畑仕事に勤しむラーエ

ルテスの姿を通して、田園の中での質素な暮らしが理想化されて描かれているといえるだろう。

2) 女神の住処

次に神々の住処としての園を見ることにする。最も有名なものは、孤島オギュギーにある女神カリュプソーの住む洞窟とその周辺であるが、以下にその箇所を引用する。これはカリュプソーの下に囚われの身になっているオデュッセウスの故郷イタカへの帰還がはやく叶うように、ゼウスによって遣わされたヘルメスが島にたどりついたところである。

ヘルメスはその遥かな島オギュギーに着き、堇色の海から上がって歩いてゆくと、やがて美しい髪の子の住む大きな洞窟にやってきた。ニフは中にいた。暖炉には大きな火が燃えていて、ヒマラヤ杉の割木や香木の燃える香が島中に漂っていた。ニフは美しい声で歌いながら、機織機の前を行ったり来たりして、金の杼で布を織っていた。洞窟のまわりにはハンノキ、ポプラ、芳しいイトスギの森が豊かに生い茂り、そこは、長い翼の鳥たち、梟、隼、海の仕事に勤しむ喧しい海鳥の住処になっていた。また洞窟の入口には豊かに房をつけた葡萄の蔓が垂れ下り、隣り合った四つの泉から清らかな水が四方八方にむかって流れていた。そして両側には瑞々しい草原が広がり、堇やせりの花が咲き乱れていた⁶。

このカリュプソーの島の風景をもうすこし細かく分析してみると、次の要素によって構成されていることがわかる。

- ① 洞窟 (σπέος)
- ② 木： 森、林 (ύλη)；ハンノキ (κλήθρη)；ポプラ (αΰτελος)；
イトスギ (κυπάρισσος)；葡萄 (σταφυλή)
- ③ 水： 泉 (κρήνη)
- ④ 草： 草原 (λειμῶν)
- ⑤ 花： 堇 (ῥόδον)；せり (σέλλνον)

木と水というのはすでに見た王侯貴族の庭園と共通しているが、ここでは木の種類がちがっていることに注目しなければならない。アルキノースの果樹園でもラーエルテスの農園でも、そこに植えられている木は、梨、柘榴、林檎、無花果というように、実をならせる木であった。しかしカリュプソーの洞窟をとりまいているのは、豊かさを象徴する葡萄のほかは、ハンノキ、ポプラ、イトスギといった、まったく別の種類の木である。これらは実をな

らせる木ではないが、葉叢の美しい、涼しげな木陰をつくる木であり、瑞々しい草や咲き乱れる花とともに、陽射の強い南国にあって人に心ゆくまでの満足を与えてくれる場所の書割となっている。「原初の庭はつくられたのではなく、発見されたのだ」と『庭園の歴史』の著者クリストファー・サッカーがいうように、この女神の住処としてふさわしいオギュギーの洞窟の周辺は、人間の手になる以前の、自然の中に発見された美しい庭なのである。洞窟と木と泉という書割は、オデュッセウスが上陸したイタカ島のフォルキュス湾の近くにあるニンフの住処の描写にも登場する。

入江の入口には長い葉のオリーブの木があり、そのそばにほの暗い、心地よい洞窟があった。それはネーイアデスと呼ばれるニンフたちに聖なる洞窟で…そこには潤れることなく清水が湧き出していた⁹。

また洞窟はないが、イタカにある別のニンフの聖所もやはり木と泉によって特徴づけられている。

そこには泉をとりまいて、水辺にポプラが茂っていた。頭上の岩からは冷たい水が流れ落ち、上にはニンフの祭壇が設けられていた⁹。

木は緑豊かに生い茂っているということで生命力のシンボルであるし、水は大地に潤いをもたらすということで、ともに豊かさを強調する意味をもっている。このような場所が女神やニンフなど超人間的存在の住処となっているように、美しい自然の場所は、一種の宗教的感情と結びついている。人間の手になる以前の、いわば神的な、優雅な、美しい自然が、それに対するほとんど敬虔といってもいいくらいの憧憬をよびさますということは、ごく容易に理解できることである。

3) 楽園・エリュシオン

ホメロスの描く自然の中の美しい場所——木があり、泉があり、草が柔らかく、青々としていて、色とりどりの花が咲き、快い風が吹いている——は、南国ギリシアにおいて人間が最も行ってみたいと思う理想の場所であるということを見てきたが、このような永遠の春の風景は楽園の描写と連続的である。ギリシアの楽園は「エリュシオンの野」で、これは祝福された人々が死後に住む楽土である。大部分の人々は死ぬと、渡し守カロンの漕ぐ舟に乗って、ハデスの支配下の冥界に赴かなければならない。第十一巻招魂の段を説

めばわかるとおり、黄泉の国の住人である死者の亡霊たちは、声をあげ、動きまわる能力はもち合わせているが、とらえどころのない、弱々しい影のような存在である。彼らは肉体を離れた、力のない魂にすぎない。しかし神々に愛された人々は、この地上のはずれにあるエリュシオンの野に移され、それまでどおり肉体をもちつづけ、幸福な生活を送ることができる。ヘレネの夫メネラウスはそのような幸福な人々のうちのひとりである。

メネラウスよ ……神々はあなたをこの地の果てのエリュシオンの野にはこんでいくでしょう。それは金髪のパリスのいる所、人間にとって最も住みやすい所だ。そこでは雪も降らず、嵐も吹かず、雨も降らない。オケアノスからやってくる西風の息吹が人々に清々しい¹⁾。

このように、選ばれた人々が死後幸せな生活を約束されている土地は、平らな草原で、雪も雨も嵐もない、爽やかな西風の恩恵に浴する、人間にとってこの上なく心地よい場所なのである。ついでにつけ加えておこならば、印欧語で「楽園」を意味する語（paradise(英)；paradis(仏)；Paradies(独)；paradiso(伊)）はもともと *paridaiza* というペルシア語を語源としており、これが「領主(貴族)の園」という意味であることは、われわれの(庭)というテーマから見て誠に興味深いことである。

以上のように『オデュッセイア』における(美しい自然)の描写の簡単な分析をおして、ギリシア人の(庭)についてのコンセプトの一端を垣間見ることができたのではないかと思う。どのような理由によってか、彼ら自身はそれを実現し得なかったようであるが、ヨーロッパ庭園史の流れ全体から見た場合、古代ギリシア人の庭園についてのコンセプトは非常に重要な意味を持っているように思われる¹⁾。それが古代ローマのヴィラの庭園、そしてイタリア・ルネサンスの郊外別荘の庭園等においてどのような形で実現されていたかを見ることを、今後の課題としていきたい。

註

- 1) Falke, J. von.: *Der Garten, seine Kunst und Kunstgeschichte*. S. 62.
- 2) Gothein, M. L.: *Geschichte der Gartenkunst* 1 2. Aufl. 1926 S. 55.
- 3) Grimal, Pierre.: *Les jardins romains* 1984, p. 78.

- 4) η, 112-131.
- 5) ω, 326-342.
- 6) ε, 55-74.
- 7) Thacker, Christopher, : *The History of Gardens* 1979, p. 9.
- 8) ν, 102-109.
- 9) ρ, 208-211.
- 10) θ, 561-568.
- 11) たとえば洞窟は、16世紀のルネサンス式庭園、18世紀の風景式庭園の重要なモチーフの一つとなるのである。

Le jardin homérique

A propos de la description des beautés naturelles dans l'*Odyssée*

A côté des chefs-d'œuvre de l'architecture et de la sculpture que nous ont légués les Grecs, on ne connaît guère d'exemples de jardin dans la Grèce proprement dite. Ni l'archéologie ni la philologie ne nous fournissent suffisamment de documents sur le jardin grec, ce qui nous laisse deviner que le peuple de la Grèce antique ne s'est pas intéressé à créer des jardins comme ceux des villas romaines ou des résidences suburbaines de la Renaissance, soit que le terrain accidenté et le climat sec du pays n'en favorisaient pas l'évolution, soit que la démocratie faisait obstacle à ce que les citoyens construisent des maisons somptueuses et des jardins privés. Le but de notre essai est de tenter de mesurer la place tenue par le jardin dans la pensée grecque, plutôt que dans la réalité matérielle, en examinant de plus près les jardins décrits dans l'*Odyssée*.

Notre analyse montrera que le jardin homérique se distingue sous ces trois formes : 1) le jardin fécond ou le jardin princier ; 2) la demeure divine ou le site enchanteur ; 3) les (Champs Elysées) ou le paradis terrestre. Et ce sera aussi un point de départ pour aborder un problème plus vaste et essentiel : Comment cette image du (jardin) homérique se réalisera dans l'histoire des jardins de l'Occident ?